３２	お　名　前	性　別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
	筏津　雄元	男　性	８０歳	１４歳	中宇利

県立熱田中学２年

①　８月１５日は，どこでどんなことをしていましたか。

学徒動員で，陸軍熱田造兵廠（兵器製作所）に勤務。

②　終戦のことを，どこで，どのように聞かれましたか。

工場内で玉音放送を聞いたが，内容は分からなかった。下宿に帰って，はじめて内容が知らされ，おどろき，涙が止まらなかった。

③　敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

聖戦だから絶対勝つと教えられ続けていたので，敗戦とは全く考えなかった。くやしくて，涙ばかり出した。教育とは恐ろしいものだと知った。

④　体験の中で，子どもたちに語り伝えておきたいこと

「空襲，機銃掃射，教育の恐ろしさ」

１９４４年（昭和１９年），私は豊橋二中に通うつもりでしたが，通学が大変なため，名古屋の伯父をたよって名古屋に行くことにしました。考えてみれば，わざわざ危険な名古屋に行くことにしたわけですが，これが運命の分かれ目でした。宇理国民学校の親友の二人は豊橋二中へ行ったのです。親友からは，「お前はまっ先に死ぬぞ。」と言われていました。ところが，その親友の二人が亡くなってしまったのです。豊川海軍工廠へ動員されたからです。私もいっしょに行っていれば，同じ運命だったはずです。本当に分からないものです。

私は，旧制熱田中学校に在籍し，名古屋の「熱田造兵廠」に学徒動員で派遣されていました。陸軍の兵器を作る大きな工廠です。全く未熟な私たちが作る兵器など，本当に役立つのかと半信半疑でした。

この頃は太平洋戦争末期で，米軍の空襲もはげしくなり，下宿していた伯父の家では夜の空襲に備え，寝間着に替えて寝ることは許されませんでした。

昭和２０年になると，いよいよ空襲もはげしくなり，工場の勤務中に空襲警報が発令されると，私たちは一斉に隊列を組み，少し離れた山林へかけ足で退避するのが常でした。

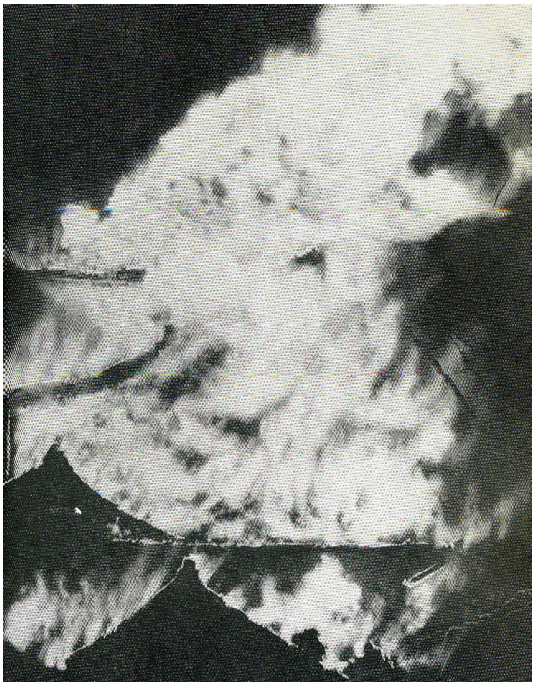
夏に近いある日，造兵廠から逃げる途中で米軍の艦載機の攻撃にあいました。戦闘機が低空飛行で，隊列めがけて機銃掃射をくり返してきます。偶然私は，道ばたに転げ落ちて助かりましたが，仲間の数人が弾に当たって命を失いました。その瞬間の怖ろしさは，とても忘れることはできません。本当に怖かったです。遠州灘から飛んでくる艦載機は，無差別攻撃をくり返しました。全く無抵抗な農作業をしていたおばさんや小学生でもねらわれました。本当に許せないですね。遊び感覚で攻撃していたとしか思えません。

ある夜の空襲で，たくさんの焼夷弾攻撃を受け，隣の家が燃えかかりました。隣組のみんなと共に，必死のバケツリレーをしました。焼夷弾が屋根に落ちて火を噴いたのです。みんな恐怖と戦いながら懸命に消火しました。当時の協力体制，仲間意識は見事だったと思います。消した時は本当にうれしかったです。

▲ **焦土と化した名古屋市中区（丸の内）**（写真集 愛知百年より）

ただ，焼夷弾が落ちるときは花火のようで，とてもきれいに見えました。下宿先が，小高い丘の上だったので，空襲で下の方が燃えるのがよく見えました。火が立ちのぼって一面が明るくなり，とてもきれいに見えるのです。

５月１４日，はげしい空襲で名古屋城が燃える時，遠くからでも煙や炎が高く立ちのぼるのが見えました。町を焼きつくし，城まで落とすのか，と腹が立ちました。Ｂ２９が夜に焼夷弾を落とすときは，時差をつけ，燃えている周辺に落とすように計算していたようです。



▲ **燃える名古屋城**　（写真集 愛知百年より）

８月１５日，終戦の詔勅*1 を工場で聞きましたが，はっきり理解できず，下宿に帰って敗戦の事実を知らされました。私は無性に悲しく，くやしく，流れる涙を抑え切れませんでした。神国日本は，東洋平和のために聖戦*2 を戦っているのだから，決して負けないと，長い間教えられ，がまんの日々を送ってきたのに，何ということか，という思いでした。

大人たちは，戦争末期の状況の中で，すでに敗戦を覚悟していたようでしたが，私たち少年は，最後まで戦勝を疑うことすらなかったという，教育のすごさと恐ろしさを，今さらのように痛感しています。

私が教育という仕事に就こうと思ったのは，これが原点でした。

---

*1　天皇が自分の考えを明らかにすること，またはその文書をいう。
*2　正義のための戦争を意味している。

○　飯田線の切符

名古屋から帰ってくるのに，飯田線の切符がなかなか買えませんでした。兵器輸送のためか，乗客が乗る切符をかんたんには売ってもらえなかったのです。駅で，学徒動員だからと交渉して買わせてもらいました。一般客で切符を買うのは難しくなっていたのです。まったくおかしな時代でした。

○　冨賀寺（ふかじ）への駐留

中宇利には中隊が駐留していました。部隊の名ははっきり覚えていませんが，２０年の１月か２月に来ました。アメリカ軍の上陸を想定し，防衛体制をつくるために１００人以上の兵士が来て，備えていたのです。寺には隊長と兵士が３０人ほどいたと思います。竹子（たけし）という名の部隊長さんが，庭に一番近い部屋で寝泊まりしていました。とても温厚で，いい人でした。弟が病気になったときなど，薬をもらって助けてくれました。軍律が厳しく，きちんとした部隊でした。食糧は地元で調達していたようです。駐留していた兵士で，中宇利の人と結婚して住みついた人もいました。

○　檀家（だんか）で戦死された人

１９年	１０名
２０年	１１名
海軍工廠	４名

戦没英霊合同墓地（せんぼつえいれいごうどうぼち）には，中宇利全体の戦没者が祀（まつ）られています。

▲ 冨賀寺の前にある「戦没英霊合同墓地」

○　寺も米不足

寺の田は人に貸していましたが，年貢（ねんぐ）はほとんど入らなくなっていました。作ってくださる方も余裕がなかったんですね。それで，配給だけでやりくりしていましたが，苦しかったです。配給は少なくて，とても足りませんでした。米がないものですから，親がサツマイモを栽培して食べたり，その茎を切って乾燥させて食べたりしました。イモがらといいますが，けっこう食べられるものでした。田畑を持っていなくて，自給できない家は，本当に大変でした。

▲ 中宇利戦勝記念写真（昭和16年頃）宇理小アルバムより